舟に刻みて剣を求む

校長　竹　澤　吉　助

ある男が，河を渡る舟から剣を水中に落としてしまった。男は少しも騒がず，剣が落ちた場所の船べりに目印を刻んだ。舟が岸に着いた後，目印のところから河の中に飛びこんで剣を捜したが，ついに見つからなかった。

河は流れ，船は進む。

船べりに刻んだ目印など何の役にも立たない。時勢の変化に気づかず，いつまでも古いしきたりを守ることの愚かさ，時機を失して大局を誤る例えである。これを「刻舟の愚」という。

我が国は今や，明治維新，昭和の敗戦直後にも匹敵する社会システム全体の一大転換期を迎え，国際的にも激しく厳しい競争にさらされる時代へと突入している。教育界も例外ではなく，こうした社会の急激な変化に適応できる創造性や行動力に富む，人間性豊かな人材の育成を強く求められている。

平成８年，中教審では，「『全員一斉かつ平等に』という発想から『それぞれの個性や能力に応じた方法，内容，仕組みを』という考え方への転換」を教育改革の基調として示した。以後，その流れは滔滔と進み，14 年４月からは新学習指導要領の完全実施となった。しかし，未だ改革への意識も体制づくりも進んでいない学校が少なくないように思う。

そうした中で，本校は三塚研究主任を中心に早くから体制を整え，全職員一体となって指導法改善に取り組んできた。それは優れて先駆的な内容であり，視察に来た多くの学校の先生方からも高い評価を受けている。新たな道を探究する諸氏の熱意と真摯な努力に対し，心からの感謝と敬意を捧げたい。

何かと制約の多い状況下でも，親や子供の立場になって考えれば工夫できることは数多い。

・習熟度別グループ指導，スキルタイムなど，指導方法・内容を様々に試みて効果を上げた。
・「総合学習」では，他に先駆けて全学年で情報教育（年間 35 時間）の授業を設定した。
・「黒松小ならでは」の児童会活動や PTA・地域とのかかわりの深い行事も数多く実施した。

学校に限らず，従来やってきたことを変えたり新しいことを始めたりする時には，誰でも不安が先立って反応が遅くなり，むしろやれない理由の方を捜すようになる。だが，それではやはり時の流れについて行けず，ついには学校に寄せられる期待と信頼を失うことにもなろう。遠い昔に，高校の漢文で習った「刻舟の愚」の故事が改めて思われる。

行く河の流れは絶えずして，船はさらに，さらに進む。

今に安住することなく，確かな見通しと柔軟な考えとをもって積極果断に教育改革をおし進め，成功に導きたいものである。　（イラストは，マガジン･ロン第８号所載）

はじめに